

## 編集後記

○「文教国文学」を発行しているのは、広島文教女子大学国文学会です。この「広島文教女子大学」という呼称の女子大学の創設者は、武田ミキという明治生まれの女性です。その武田ミキ先生が、昨年十二月二十七日午前七時五十分には永眠されました。「文教国文学」の「文教」の名も正に創設者としての縁あることです。この編集後記でも一言触れなくてはなりません。卒業生の皆さんも、藁草履を上履きとして、質素な服装で、時には掃除のおばさんと間違えられながら、朝早くから夜遅くまで学園経営のことに当たっておられたミキ先生の姿を思い浮かべることができるはずです。直接にミキ先生から苦言を呈された人も多いはず。教育に生き、教育に死する、というのが口癖であり、信念でありましたから、直接に教え子に接したいと常に願っておられたので、校舎の廊下で、校庭の片隅で、トイレの中でも、教え子に声をかけておられたのでした。教え子に直接に触れることで、教育に生きる活力を得ておられたのでありましょうか、ミキ先生の

生き様が「文教」に与えた影響の大きさは量り切れません。

○平成三年三月に肺炎に罹られ、半年ばかり広島市立安佐市民病院に入院されたのですが、退院後はリハビリに努めながら最後まで再起の意欲を失わず、再び学園長室に顔を出す日あるを願っておられました。私自身は、大学に出ている限りはほとんど毎日ほんの数分でしたが顔を見に行っていましたので、まだまだ大丈夫だと考えていました。二十五日に顔を出した時も、寝込んでおられましたが顔色もよく食も進むと聞いたので、寝顔を見ながら大丈夫・大丈夫と引きとったことでした。二十六日の日曜日に定員増認可のお礼のために二十七日に上京される予定であった学千先生と何かのことで電話でお話した時に、一寸風邪気味なので明日入院させることにしたと申されており、それは安全策で何よりです。ねと申し上げたことでした。ところが翌朝には大越さんからミキ先生死去の電話です。驚愕しました。マサカというのが、私の返事だったと思います。マサカです。

○後で学千先生に様子を聞きますと、前夜喘息気味で息が苦しうであつたのだそうです

が、応急処置で一応発作もおさまりに就寝されたので一安心、翌日は入院のことが決まっていたのでお医者様にまかせれば大丈夫ということで一件落着。翌朝、七時頃上京の前にそつと病床の様子をうかがってみられるとスヤスヤ寝ておられるし顔色もよいので安心して家を出られたというのです。ところが新広島空港に着かれて間もなく携帯電話が鳴って急変の報、飛んで引き返されたのですが、もう事切れておられたという状況であつたのだそうです。大越さんの一報で私が駆けつけたのが九時ごろだったでしょうか、ベットの上のミキ先生は付添いの人の手で薄化粧しておられたということもあるのでしょうか、生前のままの様子で、前日もおいしいと言って食事をされたようなので、顔元もフックラしておられて、正に苦しみもなく生前のままの姿でヒツソリと大往生されたという様子でした。そのフックラとしたおだやかな顔元は、納棺して最後に火葬場の中に入られるまで変わっていませんでした。歳末の二十九日の密葬には、各地から二千人をはるかに超える参会者だつたそうで、ミキ先生の人徳というのでしょうか、驚くべき人出でありました。そして一月

二十六日の学園葬の執行まで諸事万端が遅滞なく進行していきましたが、これもミキ先生の万遺漏なき性格がそのまま現れたとでも申すべき有様でありました。あの最後のおだやかで平安なお顔で、静かな目で、広島文教女子大学のこれからを、ミキ先生は見守り続けて下さるでしょう。皆ともにミキ先生の御冥福をお祈りいたします。

○新しい学年を迎えて本学の国文学科に新しいスタッフが加わりました。二名の方なのですが、三名とも言えますし、一名とも言えます。この混乱した表現は、読んで下されば氷解いたします。まず大下博子先生、初期の卒業生にとってはなつかしい名前であるはずです。佐久間博子先生というのが判り易い人もいます。可部女子短期大学に国文学科を開設した昭和四十年に、当時広島県立竹原高等学校の先生をしておられた未婚の佐久間博子先生に懇請して、発足間もない可部女子短に來ていただいたのです。いまだ山のものとも海のものとも判らない新設の短大に赴任するというのは、大変勇気のいる決断であったのではないかと思います。ミキ先生の教育熱に感染して学園創りに奔命していた私だと

て、本当のことを申せば夢のような大きな将来計画を口走ってはいましても、果たしてどういふようなことになるのやらサッパリ判らないというのが実態でありました。ただガムシヤラに気持ちよく学問が出来、教育が出来る大学創りに努めるだけということでありました。そうした草創期の学園の中で、身近な学生指導に熱心に取り組んでいた、本学の国文学科の気風創りに専心していただいたのが佐久間博子先生でした。厳しくてやさしい先生でした。広島大学の大学院で、国語学専攻で最初の女性であったのですが、そこで厳しい研究生活が身についているだけでなく、竹原高校での教師生活が学生の指導者としての幅を付け加えておられて、学生にしたわれる先生でした。間なく良縁に恵まれて結婚なされ、大下と改姓、お子様にも恵まれて一応御退職なさったのですが、お子様の手が離れられるようになってからは無理にお願いして非常勤的専任教員として勤務してもらっていました。週に一日か二日は大学に顔を出していたので、古典国語学の講義をお願いしていたのでした。近年御主人の御両親や御自身の御両親の老後のお世話で大変だと聞いていたのですが、そのお世話も終わって後始末もすんだということで、再度教職に復帰してもよろしいというお話があり、本学でも組織整備の上でも大変ありがたいということで、国語学担当の教授として再登板をお願いすることになったのです。開学当初の卒業生にとつてはなつかしいことだと存じますので、文教国文学会とか大学祭とかには是非御参会下さって、旧交をあたためていただければと存じます。

○今一人、国語学担当の教授として、友定賢治先生が御赴任になりました。友定先生も、最近の卒業生諸嬢にはおなじみの先生であります。平成二年四月に鳴門教育大学に転出されたのですが、ユーターンしていただいたのであります。非常勤としてその間ずっと勤務に置いておられましたし、お宅もずっと亀山に置いておられましたので、スッポリ昔のままで教育に研究に従事していただけるのであります。ありがたいことであります。友定先生は、大阪教育大学大学院の御出身（学部は島根大学教育学部の御出身です。）で、本学に御赴任願った頃は、大阪の府立布施高校の定時制に御勤務でした。定時制におられたの

は研究時間の確保を願ったことであったと仄聞したことでありました。ところで本学の国文学科のお若い先生方で、広島大学の大学院出身以外の出身の方が御赴任になるということは、友定先生がそのハシリであったのではないかと思います。本学はその立地条件からどうしても広島大学出身者でスタッフが整えられるという傾向があるのですが、現在では広島大学出身でないお方が過半となつて、正に多士済々という有様で、学閥的色彩が全くなくなつております。そしてそれが本学国文学科の活力を生み出している原動力ともなつてゐるのですが、友定先生はそうした学風を醸成するハシリであつたのです。私どもは気持ちよく仕事をしていただくために垣根を作らないという努力をしてきたつもりですが、仲間作りという中で時に孤立感を持たれたこともあるのではないかと推察するのですが、そういう中で友定先生は御専門の方言学の研究面で新生面を切り開いていかれ、一方学生の指導とか校務の推進とかという教育面でも着実に信頼感ある仕事を積み重ねて下さり、国文学科内だけでなく学内の各方面から本学の中堅として厚い信頼を寄せられる存在となつ

て下さつたのでした。方言学研究の業績が認められて鳴門教育大学大学院学校教育研究科担当の助教授として転出なさつたのですが、家庭的問題その他で今回のユーターンとなつたのです。友定先生がユーターンしてもよろしいという内意がある旨をまだお元氣であつたミキ先生にお伝えした時、大変心強く思われて喜色満面であられたことを想起します。病床に就かれても、今度帰つてくれる人（時に人の名前を忘れておられることもありましたが）は何時帰つてくれるのかと聞かれることがありました。ミキ先生の御存命中に友定先生のユーターンが実現しなかつたのは残念なことでした。ともあれ今後友定先生の方言学・表現学上の御研究が本学において一層の新生面を切り開かれ、研究・教育の実り豊かな成果を期待することであります。

○喜多先生の後任として押野武志先生が御赴任になりました。押野先生は山形県人です。山形大学文学部国文学科（国文学専攻）卒業後に同大学の人文学専攻科に進学され、平成元年に東北大学大学院文学研究科国文学専攻に入学、本年三月同学博士課程単位取得されたばかりの新進気鋭の研究者であります。専攻

は近代文学、主なる研究対象は宮沢賢治で、賢治作品における時間と空間の問題に興味を持ち、例えば「宮沢賢治とアインシュタイン——『銀河鉄道の夜』の四次元時空——」（『文芸研究』第一二七集）では、アインシュタインの特殊相対性理論を賢治が作品の中にどのように取り入れているかを、宗教と科学とのかわりに言及しながら論じられており、今までの研究者があまり追求しなかつた賢治作品の側面を説明しようとしておられるようであります。押野先生のそうした追求の目は、賢治と同時代作家の作品（堀辰雄の『水族館』、広津和郎の『さまよえる琉球人』など）の解釈にも及んでおり、賢治論はもとよりのこととして、押野先生の論が更に幅広く展開される可能性を予感させるのです。東北の地から中国路の可部に遥かに御赴任下さつたのは、本学では押野先生が始めてと思ひますが、四月末日の肌寒いある日、上着なしのYシャツ姿で暖かいですねと元氣潑刺でありました。広島では八木峠（ダオ）を境として可部は寒いところと理解している安芸の国人にとりましては、新しい感覚であります。そう申せば昨年新潟は十日町市から御赴任下さつた古川

徹先生も、ほぼ同様の感想を洩らしておられたのを想起しました。南の暖かい国で、新しい研究と教育の芽をはぐくみ育てて下さることを願うことであります。

○安芸の国の人でなくて備後の人ですが、武田ミキ先生もそう言えば備後は沼隈の人でしたが、広島県出身の文人で鬼籍に入られた人として井伏鱒二があります。その文業から畏敬されていたのですが、それよりその飄逸たる人柄が文壇における敬愛を集めていたように、その様子は平成五年七月十日午前十一時四十分に肺炎のため自宅近くの東京衛生病院で死去後の文芸雑誌の追悼文とか『別冊文芸春秋』二〇七号に掲載された「井伏鱒二―サヨナラダケが人生―」川島勝（雑誌『群像』の編集者です。文人仲間の追悼文より編集者など脇役の想い出の記録が迫真的で興あるのは、伊吹和子の『われよりほかに―谷崎潤一郎最後の十二年―』（講談社）の例に見るごとくですが、何故なのかと思うことです。）などによってうかがえるのです。『瓢々』とか『鬱然』とか『仏頂面』とか『頑固』とか『プラスマイナス両極の評語で語られる鱒二像は、一筋縄では処理できない大きな人間像を

感じさせられるのですが、人類にとって最初の災禍である原爆の洗礼を受けた広島在地獄図を『黒い雨』という文学に昇華させてくれた人として、鱒二は広島の人間の私どもにとっても忘れることの出来ない作家と言えるでしょう。その鱒二の書簡を、武田学千学長が最近入手されました。広島の本通りの古書肆アカデミイの店頭で見出されたようですが、安芸と備後の血の流れている学長と鱒二との感応があつたのかも知れません。少し珍しいもので御紹介します。封筒の表書きは、

新宿区市ヶ谷船河原町十一

家の光協会

小池 旻様

とあり、一〇円切手がはられての消印は「昭和三十一年三月十二日午後」を示しており、差出人名は

杉並区清水町二四

井伏鱒二

三月十一日

とあり、用紙は四百字詰原稿用紙で左下に「ABC10×20」と印刷されたもの、本文は次のようです。

拝復

御無沙汰してゐます。

先日は種々結構なものを頂き有り難う存じます。僕はこのごろ、ろくな仕事をしてゐないので、鞭撻の意味で先輩が賞を呉れたのでせう。いま雑文風の長いものを書いてゐますので、いづれこれを片づけたら少しまじめな仕事に取りかかるつもりです。

奥さんにどうか宜しく仰つて下さい。

勿々不一

別便で拙著をお送りいたします。

三月十一日

井伏鱒二

小池 旻様

昭和三十一年の手紙ですから、ここで言う「賞」というのは、昭和二十九年四月から雑誌『群像』に連載、翌昭和三十年十二月に完結した「漂民宇三郎」その他の業績に対して昭和三十年度の芸術院賞が与えられているのですが、そのことを指すのでしょうか。「漂民宇三郎」の原拠ともなった『時規物語』などを駒場の尊経閣文庫で閲覧させて、鱒二の創作意欲を喚起させて『群像』に長期連載させたのが川島勝であることが、『別冊文芸春秋』に掲載された川島自身の文章で明らかにされ

ていますが、編集者の仕事の面白さをそこにかがうことができるのですが、「このころ、ろくな仕事をしてゐない」というのは、「漂民宇三郎」完結後の中だるみの期間の気分を示しているものでしょうか。「雑文風」という仕事は何を指すのかはよく判りませんが、年表類を見ますと昭和三十一年の春から翌春にかけて「丹後路、久慈街道、甲斐わかひこ路、備前街道、天城路、近江路等を旅行」して、それが昭和三十二年に「七つの街道」としてまとめられているなどを指すのでしょうか。とすれば雑文風というのは、紀行文とでも申すべき内容で、本筋の小説でないことを言っているのでしょうか。「まじめな仕事」というのは、その本筋の小説を書くことを言っているのでしょうか、その時に鱒二に何か腹案があつてそう言つたのかどうか、昭和三十四年に「珍品堂主人」（中央公論119）が発表され、昭和三十六年に「武州鉢形城」（『新潮』8・S37・7）が発表され、そして昭和四十年に「姪の結婚」（『新潮』S41・9、40・8から「黒い雨」と改題）の発表と続くのです。還暦寸前の五十八歳の鱒二が、「まじめな仕事」を決意しており、そしてそ

れを着実に実現していると見受けられますので、ここに鱒二の作家魂を読み取つてもいいのではないのでしょうか。ところで肝心な宛名の御本人、家の光協会の小池旻氏のことが判りません。「家の光」と申しますと農協関係の機関誌的色彩がある雑誌で、戦前は大政翼賛的立場で大変力のある雑誌だったので、戦後は農協機関誌としてあまり一般には知られた存在ではないのでしょうか、その編集責任者にでも小池旻という人がいるのでしょうか。鱒二が『家の光』に投稿した気配が全く見られませんので、このあたりの鱒二との関係が判らないのです。しかしこれ以上の詮索は鱒二研究の専門家におまかせするのがよいでしょう。滋賀大の寺横武夫さんでもお調べ下されば、大変に面白いエッセイが出来上がるかも知れません。ともあれ備後の人井伏鱒二の昭和三十一年三月十一日付の小池旻宛書簡が、武田学千学長の手許にあることを報告しておきます。

○五月の陽光燦々として、青葉若葉が輝いて過ぎし易いこの頃ですが、田舎住まいの私にとりましては草取りがイヤな仕事として加わります。陽光と暖雨とでスクスクと雑草が繁

茂いたします。繁るにまかせているのですがこれが大変、自然の摂理は恵みのみをもたらすというのではありません、その中で調和しながら生活できればと念ずることです。卒業生の皆様の御健康を祈ると同時に、お便りをお待ちしております。

（横山邦治記）

## 文教國文學 第三十一号

平成六年六月二十九日 印刷  
平成六年六月三十日 発行

編集者 広島文教女子大学国文学会  
代表 友久 武文  
発行所 広島市安佐北区可部東  
一丁目二番一号

広島文教女子大学

国文学研究室内

広島文教女子大学国文学会  
（振替）広島六一三四八九四

印刷所 溪水社